

中級日本語文法シラバス再考のための文型使用実態調査

高屋敷 真人

要旨

関西外国語大学留学生別科の中級前期日本語コース（総合日本語 5: JPN5）では、交換留学生を対象に、学期中の実際の日本語接触場面で、コースで学んだ文法項目をどの程度使用したかについて実態調査を行っている。本稿は、2022 年秋学期に実施された文型使用実態調査の方法や調査結果について報告するものである。この調査の目的は、学習者の文法項目の使用実態を起点とし、学習者の実際のコミュニケーション場面（接触場面）から中級日本語文法シラバスを再考すること、そして、従来の日本語学的観点から作成された中級日本語シラバスの問題点を具体的なデータに基づいた日本語教育文法的立場から見直し検討することである。

【キーワード】 中級日本語、日本語教育文法、中級日本語シラバス、コミュニケーション・アプローチ、接触場面

1. はじめに：理論と背景

1.1 関西外国語大学留学生別科日本語中級前期コース概要と使用教材

関西外国語大学（以下「本学」）留学生別科の中級日本語コースは、中級前期（総合日本語 5、以下、JPN5）と中級後期（総合日本語 6、以下、JPN6）の 2 コースである。初級日本語コースでは、『げんき I』、『げんき II』（Japan Times）を教科書として採用しており、中級コースに進む前提は、『げんき I』、『げんき II』に相当する初級教科書を終えたレベルである。本学留学生別科の日本語コースは、春学期と秋学期の 2 学期制で開講され、主として北米を中心とした英語圏からの交換留学生が年間約 700 人学んでいる。来日前の使用教材は、『げんき』以外では、北米で多く使用されている『なかま』（Heinle & Heinle Pub）、『YOOKOSO!』（McGraw-Hill, Inc.）が多く、ついで、『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）、『まるごと』（国

際交流基金) などである。日本語コースは、1 学期 15 週間、1 コマ 90 分の授業を週 3 回行っており、総授業時間は 67.5 時間である。JPN5 と JPN6 のコースの目的は、日本語能力試験 N3 と N2 の合格ラインを目指した日本語能力の養成である。

本稿では、JPN5 で使用されている教科書、『日本語会話 5』の文法項目の使用実態調査について報告する。この教科書は、筆者を含めた本学教員によって執筆、作成されたものである。留学生別科の 2022 年秋学期は、新型コロナウイルス感染症の水際対策で入国を待たされていた約 200 名の留学生を含め、例年より多い 511 名の交換留学生在来日し、コロナ禍の影響で 2020 年春学期の途中からオンライン開催を余儀なくされていた日本語コースも 2 年半ぶりに対面授業で行われた。通常の対面授業に戻り、日本語使用に関するアンケート調査も復活することができるようになった。2022 年秋学期、JPN5 では、日本滞在中にコースで学んだ文型を実際に使用し日常生活で日本人と会話を行ったかどうかの使用実態調査を行った。本稿では、その調査方法と調査結果について報告し、JPN5 の教科書である『日本語会話 5』で取り上げている中級文型が実際のコミュニケーション場面で役立つものであったかどうかについて検証したい。

1.2 先行研究：現行の文法シラバスの問題点

庵・山内は、具体的データに基づいた複数の異なるアプローチによって初中級の文法シラバスを改正することで、これからの文法シラバスを再考していく様々な試みについて報告している(庵・山内 2015)。庵は、現行の日本語初級教育において、従来の日本語教育シラバスは、具体的なデータに基づいて作成されたものではなく、作成当時の日本語教育関係者の経験値(あるいは、「勘」)によって定められていたことを指摘し、そのような過程で作成された現行文法シラバス自体が問題なのではなく、我々日本語教育研究者が問うべきは、現在に至るまでその実質的な改訂を省みて来なかった我々自身の姿勢なのではないかと問題提起を行っている。庵は、こうした現状の問題点として、実際のデータに基づく使用実態を考慮せず、盲目的に全ての文法項目を産出レベルとして捉えて教えていることを挙げ、文法項目は「理解レベル」と「産出レベル」に分けて教える「やさしい日本語」という概念を提唱している(庵 2009)。具体例として、庵は、初級文型「～でしょう」を取り上げ、

日本語学的観点からは、「推量の「でしょう」」は基本的な形式と見なされるため実際の使用度の少なさ、用法の特殊さにも関わらず初級教科書で取り上げてきていると考えられるが、文法を初級だけで片付けるべきではない。また体系よりも実際の使用状況を重視するという日本語教育文法的立場からすればこうした考え方は不適切であると言わざるを得ない。（庵 2009）

と述べている。

また、庵は、小林の日本語教育における基本的文法項目についての研究を取り上げ、既存の日本語教育の初級文法シラバスが「シンタクスに関わる狭義の文法」を扱っているのに対して、中上級では「複合辞を中心とする機能語の学習」に偏っていることを指摘している（庵 2015; 小林 2009）。

小林は、「日本語母語話者のコーパスを用いた研究では、現行の初級文法シラバスには、実際の言語運用が十分に反映されていないことが明らかにされている」と述べ、「基本的な文法項目」とされている中にも、中級、上級の学習者にまったく使用されない項目があることを明らかにしている（小林 2009）。

これに加えて、野田も同様に、現行の日本語教育文法について、学習者の多様化に対応する文法項目を再考することが求められているのではないかと述べ、従来の日本語学的見地に依拠しない「日本語学習者が日本語でコミュニケーションする時に必要な文法」への見直しが必要なのではないかと提唱している（野田 2005）。庵や小林が具体的なデータや母語話者のコーパス研究から得た使用実態を基にした文法シラバスの改訂を唱えているのと同様に、野田も、日本語学習者のコミュニケーション能力を向上させるためには、「言語学的な研究から出発し、その論理で教育内容を決めるというやり方をやめ」、「日本語を使う状況から出発し、その状況でどんな能力が必要かを考えて教育内容を決めるようにしなければならない」のではないかと述べている（野田 2005; 野田 2012）。

これらの現行の文法シラバスの改訂について、先行研究では、主として、「名大会話コーパス」、「朝日新聞データベース」「新書コーパス」「BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）」などの日本語コーパスを利用した分析が行われている。例えば、庵は、これらのコーパスにおける出現頻度を調査し、その結果を基に、新

しい初級文法シラバス、及び、新しい中上級文法シラバスの提言を行っている（庵 2015）。また、初級文法の見直しについて、田中は、初級総合日本語教科書の準全数調査を行い、「初級総合教科書から見た文法シラバス」についてデータ分析を行い報告している（田中 2015）。

本学留学生別科の中級前期レベル（JPN5）の教科書、『日本語会話 5』の作成時を振り返ってみると、筆者を含めた日本語教員でプロジェクト・チームを組み、教科書の執筆を行ったのであるが、その際、教科書の文法シラバスをデザインするにあたって、事前に大学レベルでの中級日本語学習者（留学生）がどのような接触場面での日本語を必要としているのかについての実態調査を実施するということはなかった。もちろん、教材作成の際は、基本的にコミュニカティブ・アプローチの理念に則り、教員が一方向的にシラバスの決定を行うのではなく、学習者の視点に立ち文法項目を考えて決めるよう、チームのメンバーと討議、検討は充分に行っていたとは思いますが、具体的なデータを基に文型（文法項目）を選定したわけではなかった。2022 年度現在、『日本語会話 5』の使用を始めて 10 年以上が経過し、教科書の文法項目や本文の内容について見直しをするいい機会でもあることから、『日本語会話 5』で採用されている文法シラバス（文法項目）について、2022 年秋学期に留学生が実際に日本語接触場面で使用したかどうかの実態調査を行った。このような調査を行う理由は、庵や野田の問題提起で述べられているように、日本語教員は、一度定められた文法シラバスに囚われることなく、学習者が現実に遭遇するコミュニケーション場面（接触場面）について継続して調査していくことで、学習者のニーズを重視した教材作りを行い、常に学習者の要望に対応する教材の開発をすることが重要であると考えているからである。

2. 『日本語会話 5』における各課の文法項目（文型）の選定

はじめに、関西外国語大学留学生別科の中級前期コース（JPN5）で使用されている教科書、『日本語会話 5』の文法シラバスの作成過程について説明をしておきたい。『日本語会話 5』の執筆にあたっては、本学教員による教科書開発のプロジェクト・チーム内で、まず、本学の 15 週間というコース期間に合致するように 7 課～8 課を作成することが決められた。1 課につき約 4 コマの授業数で学習できるようにすれば、復習テスト、習熟度テスト、パワーポイントによる発表、中間試験、期末試験

などを含め、15週間で無理のないスケジュールが組めそうであった。更に、中級レベルの文法シラバスのデザインについては、初級教材のように体系的な構文の積み上げについて考慮する必要がないことから、言語の社会的機能に主眼を置き、機能シラバスを採用することに決定した。シラバス・デザインにおいては、留学生が実際の日本語接触場面で使用できるような実用的な会話場面になるように留意し、下記の通り、言語機能によって分類し、各課のシラバスを決定した。

第1課	くだけた話し方	Casual Speech
第2課	丁寧な話し方	Honorific Language
第3課	感情を伝える	Conveying One's Emotions
第4課	謝る・感謝する	Apologizing & Thanking
第5課	頼む・誘う・断る	Requesting, Inviting & Refusing
第6課	なぐさめる・はげます・アドバイスする	Comforting, Encouraging & Advising
第7課	自慢する・ほめる・からかう・不満を言う	Boasting, Praising, Teasing & Complaining

JPN5では、日本語能力試験N3からN2レベルの文型を取り扱うことになっていたため、JPN6の教材で取り上げられているN2レベルの文型と重複しないように考慮した。次に、各課に振り分けられた言語の社会的機能に着目しつつ、それぞれの言語機能における行動が遂行される場面で、どの中級文型が有用であるかを考慮しながら文法項目を選定し、下記のように各課に振り分け、それぞれの課で取り扱う機能シラバスに合致する短い日常会話を本文会話として作成した。

第1課 くだけた話し方 Casual Speech

口語体での会話に見られる音韻変化、助詞の省略、倒置、相槌などについて

第2課 丁寧な話し方 Honorific Language

待遇表現の復習

「～だけじゃなくて、～も」「～そうに/もない」「～なら～たらどうですか」「形

容詞（語幹）+ め」「～方だ」「～ようになる」

第3課 感情を伝える Conveying One's Emotions

「～くらい/ほど～」「～てたまらない」「Noun+っぽい」「～なんか/なんて、～」「～ばかり」

第4課 謝る・感謝する Apologizing & Thanking

「～おかげで、～」「～せいで、～」「～て来る」「～て行く」「～たら/ば、～のに」「～ことになる」「どんなに～ても、～」

第5課 頼む・誘う・断る Requesting, Inviting & Refusing

「～ところだ」「～ように言う/伝える」「～としたら、～」「～としても、～」
「Imperatives: 命令形」

第6課 なぐさめる・はげます・アドバイスする

Comforting, Encouraging & Advising

「～ほど～ない」「～しかない」「～ようにする」「～ものだ」「～うちに、～」「～ば～ほど、～」

第7課 自慢する・ほめる・からかう・不満を言う

Boasting, Praising, Teasing & Complaining

「～だけで、～」「～だけでは、～ない」「～わけがない」「～まま（で）、～」「～くせに、～」「～からと言って、～わけではない」「～わけにはいかない」

本文会話を作成する際は、各課の機能シラバスに基づいて、留学生が日常生活で日本人とコミュニケーションを行う具体的な場面で、それぞれの文型が自然な形で用いられるように心がけた。また、本文会話の場面設定では、選定した文型がどのような日本語接触場面で用いられるかを考え、交換留学生にとって自然で無理のない場面を選ぶという方法を採用した。例えば、第4課の「謝る・感謝する」であれば、「インターンシップ内定のために推薦状を書いてくれた教授にお礼を言う」などの

具体的場面で、文法項目「～おかげで、～」が有用であるので、「先生、有難うございました。先生が推薦状を書いてくださったおかげで、インターンシップに受かりました。」などのように、機能シラバスに沿った本文会話（小会話）を1課につき5～6程度作成した。作成中は、執筆者全員で討議を重ねながら、それぞれの言語機能における行動場面で文型がどのように用いられるか、あるいは、逆に、効果的に使用されるのはどのような場面であるかを考慮しながら注意深く選定を行った。しかし、どのように注意深く選定を行っても、前述の庵の指摘にあるように、我々が作成した『日本語会話5』の文法シラバスも具体的な調査データに基づいて選定されたものではなく、我々、プロジェクト・チームの日本語教員の経験値からの想像の枠を超えるものではないと言えるだろう。では、次に、このような過程で作成された『日本語会話5』の文法項目がどの程度、留学生の実生活で役立ったのかを見るために、2022年秋学期に実施された文法項目の使用実態調査の結果を検証して行きたい。

3. 文法項目の使用実態調査

3.1 調査方法と調査結果

2022年秋学期の最後に、Blackboardのアンケートを用い複数回答問題を作成し、筆者が担任であったJPN5の2コースの履修学生に「今学期勉強した文型（ぶんけい：sentence structures）を日本人と話す時、よく使いましたか。Are the sentence structures you've learned this semester useful in your daily life in Japan? Please choose the one you think it's useful. [Multiple answers allowed]」という設問に回答してもらった。回答は複数回答可である。履修学生34名中、回答のあった留学生29名の内訳は、下記の通りである。

2022年度秋学期

男女比： 男子学生8名 女子学生21名

国籍： アメリカ19名、イギリス2名、オーストラリア、ドイツ、スペイン、イタリア、ロシア、トルコ、スウェーデン、アイスランド、各1名

関西外国語大学留学生別科の交換留学生は、主にアメリカを中心とする提携校と

の交換留学生（留学生の6割はアメリカ国籍）で、留学中は、日本語コースの他に、英語で国際政治、経済、ビジネス、歴史などのレクチャー・コースも履修する必要がある。そのため、国籍や母語が様々でも、留学生は全員、英語を母語、あるいは、第2言語として使用することが出来る。この理由から日本語教育の際には、主に初級レベルの学生には、媒介語として英語を使用することが可能である。中級コースを学ぶ留学生の年齢層は、大学2年生から4年生がほとんどで、いわゆる成人学生（mature aged students）は、今学期は在籍しなかった。男女比に関しても、今学期はトランスジェンダーの学生が1名在籍していたので、性差、ジェンダー差等を含めて安易に男女の二分法で分けることはできないと感じた。今後、男女差での比較については、その意義を検討し直していく必要があるであろう。文法項目のうち、「～て来た」と「～て行く」、「～だけで、～」と「～だけでは、～ない」、それに、「～としたら、～」と「～としても、～」は、それぞれ対照表現としてセットで提示した。『日本語会話5』で学ぶ33の文法項目の調査結果は、使用度の比率が高い順に、下記のように表1にまとめた。

表1

2022年秋学期「今学期の文法項目：日常生活で使用したか？／役に立ったか？」

Thanks to; due to...[for a desirable result] ～おかげで、～ e.g. 友だちがたくさんできた <u>おかげで</u> 、日本の生活が楽しいよ！	100.00%
Because; due to...[for an undesirable result] ～せいで、～ e.g. 飲みすぎた <u>せいで</u> 、頭(あたま)がいたいよ。	96.43%
～ish; ~ like Noun +っぽい e.g. このラーメンは、ちょっと油(あぶら) <u>っぽい</u> なあ。	92.86%
not only~, but also~ ～だけじゃなくて、～も e.g. 私は英語 <u>だけ</u> じゃなくて、フランス語 <u>も</u> わかりますよ。	82.14%
Imperatives: <u>食べる</u> ; <u>飲め</u> ; <u>勉強しろ</u> ; <u>来い</u> Exception: <u>くれ!</u> Negative: <u>食べるな!</u>	82.14%
no matter how ~ どんなに／いくら～ても～。 e.g. <u>どんなに勉強しても</u> 、いい点が取れないんだ。	67.86%

<p>to be about to do:V-dic ところだ to be midst of doing~:V-ているところだ to have done ~:~たところだ e.g. 今から、電車に乗るところだよ。</p>	67.86%
<p>If it's the case that ~, why don't you ~ ~なら~たらどうですか? e.g. 京都に行く<u>なら</u>、有名(ゆうめい)なお寺を見<u>たらどうですか</u>?</p>	64.29%
<p>While~ [Before the condition changes/ceases~] ~うちに、~ e.g. あついうちに、ピザを食べてね。 = つめたくならない<u>うちに</u>、ピザを食べてね。</p>	64.29%
<p>on [i-adjective] side i-adj-stem + め e.g.このピザは、おおき<u>め</u>ですね。</p>	60.71%
<p>to come to do/to be able to ~ the V-dic/the V-potential + ようになった e.g. 日本語がべらべら話せる<u>ようになった</u>よ。</p>	60.71%
<p>things/person/event such as ~ ~なんて、~ Noun なんか、~ e.g. 納豆(なっとう) <u>なんか</u>、食べないよ! 納豆(なっとう)がこんなにまずい<u>なんて</u>、知らなかったなあ。</p>	60.71%
<p>it cannot be true that~;No way that~ ~わけがない e.g. 田中さんは魚が大きいだから、すしを食べる<u>わけ(が)ない</u>よ。</p>	57.14%
<p>(to do ~) by maintaining (a certain state) (to do ~) without changing (a certain state) V-ta + まま(で)、~;V-nai + まま(で); Noun + まま(で) e.g. 日本の家では、くつをはいた<u>まま(で)</u>、うちに入ってはだめだよ。 or くつ<u>のまま(で)</u> / くつをぬが<u>ないまま(で)</u></p>	57.14%
<p>if...(contrary to the reality), ...would/could... ~たら／ば...のに。 e.g. けんは、毎日勉強した<u>ら</u>、もっといい点がもらえる<u>のに</u>。</p>	53.57%
<p>On ~ side [the short from] + <u>方(ほう)だ</u> / na-Adj + な<u>方だ</u> / Noun + の<u>方だ</u> e.g. ジョンはよく食べる<u>方だ</u>ね。</p>	50.00%
<p>nothing but; only; just Noun ばかり~ / V-te ばかりいる e.g. ジョンは肉<u>ばかり</u>食べる / ジョンは肉を食<u>べてばかり</u>いる。</p>	50.00%

<p>come to (the process verb) [continuation of change up to the present] ~て来た e.g. 日本語がだんだん上手になって<u>来たよ!</u> will go on to become (the process verb) [continuation of change into the future] ~て行く e.g. 1月になったら、もっと寒(さむ)くなって<u>行くよ。</u></p>	50.00%
<p>to have no choice but to do~ V-dic + しかない e.g. さいふを忘れたので、友だちにお金をかりる<u>しかないよ。</u></p>	50.00%
<p>The more~, the more~ ~ば、V-dic + ほど、~ e.g. ピアノは、練習すれば<u>練習するほど</u>、上手になるよ。</p>	50.00%
<p>I must not: V-dictionary + わけにはいかない I must: V-nai + わけにはいかない e.g. 明日は大事なテストがあるから、大学を休む<u>わけにはいかない。</u> 明日はテストがあるから、大学に行か<u>ないわけにはいかない。</u></p>	50.00%
<p>to the extent that ~ ~ くらい / ほど、~ e.g. 最近(さいきん)、寝(ね)られない<u>ほど</u>、いそがしいよ。</p>	46.43%
<p>It is not likely that ~ V-stem + そう に/も ない e.g. この料理(りょうり)は食べられ<u>そうにないよ。</u></p>	42.86%
<p>to tell/ask someone to do ~ 人に~ように言う / 伝える e.g. メアリーにビールを持って来る<u>ように伝えて</u>くれない?</p>	42.86%
<p>not ~to the degree that ~ ~ほど、~ない e.g. みんなが思っていた<u>ほど</u>、テストは難しく<u>なかった。</u></p>	42.86%
<p>to try (not) to do~ ~ようにする e.g. 宿題は、毎日<u>するように</u>してください。忘れない<u>ように</u>してください。</p>	42.86%
<p>It is common knowledge that~ ~ものだ e.g. テストの前は、みんな、緊張(きんちょう)する<u>ものだよ。</u></p>	42.86%
<p>by merely doing/being ~; simply because ~ ~だけで、~ (not ~) by merely doing/being ~; (not~) simply because ~ ~だけでは、~ない e.g. クラスに出る<u>だけで</u>、日本語が上手になりますか? いいえ、クラスに出る<u>だけじゃ</u>、上手になり<u>ませんよ。</u></p>	42.86%

Unbearably ~ ~てたまらない e.g. 今日は、頭(あたま)がいたくて <u>たまらない</u> よ。	39.29%
It is decided/arranged that ... ~ことになった e.g. ごめんね。週末、アルバイトをしなくちゃいけない <u>ことになった</u> の。	39.29%
in spite of the fact that ~[accusing tone] ~くせに、~ e.g. けんさんは大学生の <u>くせに</u> 、こんなにやさしい漢字が読めないの？	39.29%
you cannot necessarily expect that ~ just because/even if ~ ~からと言って、~わけではない e.g. 日本に住んでいる <u>からと言って</u> 、 留学生がみんな日本語が上手になる <u>わけではない</u> よ。	39.29%
Supposing~ ~としたら Even supposing~ (たとえ)~としても e.g. お金持ちだ <u>としたら</u> 、大きい家に住みたいです。 でも、お金持ちだ <u>としても</u> 、高い車はほしくないです。	35.71%

3.2 調査結果の分析：上位5文型

文法項目の実態調査の結果、調査した33文型のうち、留学生の日常生活で、全く使用されなかったものはなかった。一番使用度が低かった「~としたら/~としても~ない」でも、35.7%の使用率で、3割強の留学生が日常生活で使用していることがわかった。33文型のうち、22文型は50%以上の使用率で、学期中に学んだ中級文型は、留学生の日常生活で一定程度使用され、ある程度有用であったと言えるだろう。

本学の交換留学生は、学期中、関西外国語大学の学生寮、「結」に入居する留学生とホームステイ・プログラムを利用し枚方市近郊にホームステイする学生に分かれるが、2022年秋学期は、コロナ禍の影響でホームステイ・プログラムは実施されなかった。コロナ禍前に実施した筆者の「日本語接触場面アンケート調査」の結果を見ると、2017年秋学期から2019年秋学期の4学期間の留学生総数120名のうち、「駅員に切符の買い方を聞く」、「レストランでメニューについて質問する」など、ある目的を達成するために何かを遂行するような明確な特定場面ではなく、日常生活時の単なる「雑談」のために日本語を使用したいと考えていることが明らかにな

った。更に、寮住まいの留学生の場合では、接触する日本人は、寮内、キャンパス内外を合わせて、日本人の友人が特筆して多いこともわかった。日本人の友人以外の日本人との接触については、日本人の友人との接触が 48 回で突出して多く、次に飲食店スタッフとの接触が 6~7 回程度で続き、友人以外の日本人との接触は、我々日本語教員が思っていた程、多くなかった。留学生は、学期中、ほとんど寮内外での日本人学生の友人とのおしゃべりでの日本語使用に終始していることが明らかになった（高屋敷 2020）。

この日本語接触場面アンケート調査の結果を考慮しつつ、表 1 の文法項目の実態調査の上位 5 文型を見てみたい。結果を見ると、使用率 80%以上の文型は、「~おかげで、~」（100%）、「~せいで、~」（96.4%）、「Noun+っぽい」（92.9%）、「~だけではなく、~も」（82.1%）、「命令形」（82.1%）の 5 文型であった。どの文型も、日本人の友人とのおしゃべりの際、使いやすそうなものであるように思われる。

1 位は、「~おかげで、~」が 100%の使用率で、回答者 29 人全員が日本語接触場面で使用していた。次いで、「~おかげで、~」とセットで導入し文型練習を行った「~せいで、~」が 96.4%で続いている。この文型の文型練習時には、コンテキストを明確にし、日本人学生と雑談するという接触場面で、例えば、「由香が京都を案内してくれたおかげで、週末は楽しかったよ。」「コロナ禍/台風のせいで、どこにも出かけられなかったね。」などの例文を練習したのであるが、授業後、寮内の日本人の学生との会話ですぐに使用できたようで、実用性が高かったのではないかと推測される。

「Noun+っぽい」に関しては、例えば、「子供っぽい性格」、「大人っぽい態度」などの一般的な使用例の他に、「オタクっぽいファッション」、「アイドルっぽい女の子」、「チーズっぽい味」など例文の汎用性が高く、友人同士のカジュアルな会話場面で造語なども作り易かったのではないかと思われる。

同率 4 位の「~だけではなく、~も」についても、「英語だけじゃなく、ドイツ語も話せるよ。」「お好み焼きだけじゃなく、たこ焼きも食べたよ。」など、様々なコンテキストで汎用性が高く、日常生活の多くの場面で応用が利くことから、使用率が高かったのではないかと思われる。

留学生の雑談の話題は、前述した日本語接触場面アンケート調査の結果から、「スポーツ」、「ゲーム」、「漫画/アニメ」が常に高い比率を占めていることが分かって

いたが（高屋敷 2020）、同率 4 位の「命令形」は、留学生の関心が高い日本のアニメや動画配信サイトのドラマで多用されているので、留学生の関心も高く、授業時の文型練習では、「負けるな！」「死ね！」「生きろ！」「逃げろ！」などの例文に対して反応が大きかった。友人とのくだけた会話において高頻度で使用されたのではないかと推察する。

これらの上位 5 文型の分析結果については、1 学期間の 29 名のみのものであるので、今後、調査を継続し調査人数を増やすこと、分析に関しては、結果の数字からの我々日本語教員の推察の域を出ていないので、今回は、文法項目の使用実態調査と並行して、日本語接触場面アンケート調査のフォローアップ・インタビューも行い、具体的にどのような接触場面で文法項目を使用したのかについても今後、更に明らかにしていきたい。

3.3 調査結果の分析：下位 5 文型

下位の 5 文型は、どれも 30% 台で、「～としたら、～」と「～としても、～ない」のセットが最下位の 33 位 (33.7%) で、「～てたまらない」、「～ことになった」、「～くせに、～」「～からと言って、～わけではない」が同率 39.3% で、32 位であった。3 割から 4 割の留学生が実生活で実際にこれらの文型を使用しているので、この比率を高いと見るか低いと見るかについては、まだ断定することはできないと思われる。今後の使用実態の調査結果を蓄積していかなければならないであろう。

一番使用率が低かった、何か仮定をする時の表現「～としたら、～」は、コンテキスト練習時には、「アニメのキャラクターになれるとしたら、何になりたい？」、「魔法が使えるとしたら、何がしたい？」など、もし非現実な事柄が実現できたとしたら、どうするかといった場面設定で会話練習を行った。あるいは、「京都に行くとしたら、何する？」などのように、日本人の友人と一緒に出かける場所を仮定し外出先を決める場面でも、会話練習を行った。練習時の反応は鈍くはなかったと思うが日本人学生との「おしゃべり」の話題としては、他の文型と比較し、大きな関心を抱くものではなかったようである。

「～てたまらない」は、第 3 課の「感情を伝える」という機能シラバスに合うように、「ペットの犬が死んで、悲しくてたまらないんだ。」、「～ちゃんが大好き！会いたくてたまらないよ。」、「あ～、アイスが食べたくてたまらない！」などの例文

で練習を行ったが、今まで、どの学期も練習時のリアクションは良かったように記憶しているので、この文型の使用率が低かったことは、担当教員にとっては意外な結果であった。

「～ことになった」は、第4課の「謝る」という機能シラバスで用いられ、友人の誘いを断る際の言い訳をするという場面で、「ごめんね。週末の飲み会、行きたいんだけど、急にアルバイトに行かなくちゃいけないことになっちゃったの。」等の例文で練習を行った。この項目は、庵（2015）が提案している4種のコーパスの使用頻度から選定された新しい中上級シラバスの Step 4（中級）にも選定されている文法項目でもあるので、この項目はこのまま残し、今後も使用実態の検証を続けて行く予定である。この文型を用いた教室活動については、もう少し会話練習時のコンテキストや例文を工夫する必要があるのではないかと考えている。

「～からと言って、～わけではない」は、「アメリカ人だからと言って、みんなピistolを持っているわけじゃないよ。」「日本人だからって、みんな寿司を食べるわけじゃないよ。」などステレオタイプの考え方に対して反論するというコンテキストで練習を行ったが、留学生は、産出レベルで、このような少し長い複文での会話練習を行うのに苦労しているようであった。この文型の「～からと言って」と「～わけではない」は、庵の中上級シラバスの Step 4（中級）で、それぞれ、頻度の高い文法項目として選出されているので、「～からと言って、～わけではない」として、セットで導入するのであれば、産出レベルで無理に会話練習をさせずに、理解レベルの文法項目として扱っても良いかもしれないと感じた。

「～くせに、～」は、対話の相手を揶揄する際に使用できるとして、「友人をからかう」という接触場面で会話練習を行った。例えば、「日本人のくせに、寿司を食べないの？」と質問させ、前述の文型「～からと言って、～わけではない」を用い、「日本人だからと言って、みんな寿司を食べるわけじゃないよ。」と反論させる練習を行ったが、友人との距離感によって、「友人をからかう」ことは、言い方を間違えれば、「友人を馬鹿にする」、「友人にステレオタイプを押しつける」などの行為・発言と紙一重である。また、「～くせに、～」は、庵の Step 1～Step 2 の初級文法シラバス、Step 3～Step 6 の中上級文法シラバスのどちらにも選出されていないので、コーパスでは使用頻度が低い文法項目の一つであることもわかった。このようなことから、「～くせに、～」については、今後の調査結果を検証し、理解レ

ベルで扱うかどうか等も含め、学べき文法項目として選出するかどうか再考が必要かもしれないと感じた。

4. まとめ

野田 (2012) が編者を務めている『日本語教育のためのコミュニカティブ・アプローチ研究』では、多くの日本語教育研究者らによって、日本語の構造や体系を重視する言語学的な研究の論理で決められた教育内容から脱却し、実際に日本語を使用しコミュニケーションを行う学習者の側から教育内容を再考するための様々な提言がなされている。これらの提言から、日本語接触場面の研究においては、我々日本語母語話者同士の間で実際にどのようなコミュニケーションが行われているのか、そして、非母語話者である学習者はどのようなストラテジーを用いてコミュニケーションを遂行しようとしているのか、どのようなことがコミュニケーションを阻害する要因になるのか等の研究を続ける必要性が見てとれる (清 2012; 宇佐美 2012; 奥野 2012; 迫田 2012 など)。これらの提言を参考にし、今後も、留学生一人一人の声に耳を傾け、彼らの日本人との接触場面において、非母語話者である留学生が発信するもの、母語話者である日本人が発信するものを継続して調査し、その都度、教材の改訂を行う、新たに教材化するなどしていかなければならないと考えている。これからの日本語教育において、学習者が日本語接触場面で、実際にどのように文法項目を使用しているのか知るための調査を行うことは大変重要な意味を持つのではないかと感じている。

今回の文法項目の使用実態調査の設問 2 では、「今学期、この JPN5 のコースで勉強したかった文型 (ぶんけい: sentence structures) がありますか? Are there any other sentence structures you want to learn this semester?」というコラムを設け、自由記述方式で書いてもらった。初級教科書を終えたばかりの初中級レベルの留学生にとって、自分が学習したい中級日本語文法を自ら明示し記述するのは難しかったようで、回答は、「I hope～」のみであった。この回答に該当する日本語文法項目は、「～を願っている」、「～をお祈りいたします」、「～を期待しています」、「～ますように」など、いくつか考えられるが、本人が望む表現がどの表現なのか、アンケート調査のみでは明らかにできないので、やはり本人へのフォローアップ・インタビューで確認することが必要なのではないかと実感した。

6名の学生からは、「今学期の文型は全部いいです。」、「I'm not sure what kind of structure I would ask for so it's all good.」、「いいえ、この文型はいいと思います。」、「None that I can think of, I learned a ton of useful ones though.」、「I cannot think of anything, but it was a great semester!! ありがとうございます!」、「いいえ、今学期本当に楽しかった!」など、秋学期の学習項目について、好意的、あるいは、全ての文法項目が有用であった旨のコメントがあった。

上記の野田らの提言にもあるように、今回、JPN5の教科書『日本語会話5』で採用されている文法項目の使用実態調査の結果から、日本語接触場面での一人一人の学生のニーズを実現させるため、それぞれのその場の適切なコミュニケーションの過程を重視した教材を作成して行く必要性について改めて実感させられた。そのためには、教員は、自身の経験値から推測する文法項目の使用例の枠組に囚われないようにする必要があるだろう。今後、既成の中級文法シラバスの枠組みの呪縛を離れ、留学生へのアンケート調査に加え、フォローアップ・インタビューなども交えて、それぞれの文法項目について使用実態や文型使用のニーズがどこにあるかについてより綿密な調査を続けていきたい。そのような具体的なデータの結果を分析し接触場面を選定し、その中から学習者が望む場面を先行させながら最終的に文法項目を選定し、教材化に繋げて行ければと考えている。それを実現するために、今後も毎学期、学生へのアンケート調査及び、フォローアップ・インタビューを継続し、具体的なデータの結果を基に教材作成のための接触場面を蓄積していく予定である。

また、今後の調査結果で、平均的に使用度が低い文法項目がある程度明らかになって行った場合、庵(2012)が提案している、具体的なデータに基づいた使用頻度の高かった新しい文法シラバス: Step 1～Step 2の初級文法シラバス、Step 3～Step 6の中上級文法シラバスの中から、関西外国語大学留学生別科の留学生が望む新たな文法項目を選び、試用教材を作成し、同様の調査を続けていきたいと思っている。例えば、Step 2(初級後半)で選出されている、目的を表す「～ために、～」と「～ように、～」、Step 4(中級)の「～ず、～」、「～べきだ」、「～にわたって、～」、「～を通じて、～」、「～わけだ」などの文法項目は、本学の初級レベルの教科書、『げんき I』、『げんき II』、そして、中級前期レベルのJPN5の『日本語会話5』でも選出されていないので、今後、現行教科書の文法シラバスの改訂を行う時には、

新しい文法項目の参考資料として活用して行きたい。

参考文献

- 庵功雄（2015）「日本語学的知見から見た初級シラバス」庵功雄・山内博之（編）『データに基づく文法シラバス』くろしお出版, 1-14.
- 庵功雄（2015）「日本語学的知見から見た中上級シラバス」庵功雄・山内博之（編）『データに基づく文法シラバス』くろしお出版, 15-46.
- 庵功雄（2009）「推量の「でしょう」に関する一考察 ―日本語教育文法の視点から―」『日本語教育』142, 58-68.
- 庵功雄・山内博之（編）（2015）『データに基づく文法シラバス』くろしお出版
- 宇佐美まゆみ（2012）「母語話者には意識できない日本語会話のコミュニケーション」野田尚史（編）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版, 63-82.
- 奥野由紀子（2012）「非母語話者の日本語コミュニケーションの問題点」野田尚史（編）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版, 85-104.
- 小林ミナ（2009）「基本的な文法項目とは何か」小林ミナ・日比谷潤子（編）『日本語教育の過去・現在・未来 第5巻 文法』凡人社, 40-61.
- 迫田久美子（2012）「非母語話者の日本語コミュニケーションの工夫」野田尚史（編）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版, 105-124.
- 清ルミ（2012）「日本語教師には見えない母語話者の日本語コミュニケーション」野田尚史（編）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版, 43-62.
- 高屋敷真人（2020）「中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査（2）」『関西外国語大学留学生別科日本語論集』29号, 31-45.
- 田中祐輔（2015）「初級総合教科書から見た文法シラバス」庵功雄・山内博之（編）『データに基づく文法シラバス』くろしお出版, 167-192.
- 野田尚史（編）（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 野田尚史（編）（2012）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版

[\(mtakayas@kansaigaidai.ac.jp\)](mailto:mtakayas@kansaigaidai.ac.jp)